

近代の福祉に生きた女性パイオニア (その1)

— フローレンス・ナイチンゲールとジェーン・アダムズ —

鈴木 真理子

Woman Pioneers Who Lived for Modern Socialwork (1)

— Florence Nightingale and Jane Adams —

Mariko SUZUKI

The modern era, especially from the latter half of the 19th century to the early 20th, had a big development in the fields of natural sciences, industries, and cultures and societies. The industrial and technological developments contributed to increase rich people but sometime new class conflicts and problems were prevailing.

Thanks to these social changes, some women were able to appeal that they wanted to reform the social contradictions and to work for the better lives of the common people's. Those women were not born to the aristocrat families but to the middle class families. Thus, they were rather free from the old customs so that they could participate in various new fields directly. They could not only show their potential power of the women's, but to challenge many things : poverty research, public health, nursing care and other human service of social work.

Among many women, the most famous ones were : Florence Nightingale (1820-1910) in nursing, Beatrice Webb (1858-1943) in social security, Mary Richmond (1861-1928) in social work education, and Jane Adams (1860-1935) in settlement movement. They were recognized very liberal and independent women in a new era since they could make their own living without the family support. But they had sometimes experienced hardship and trouble because of their challenging spirits and activities. We may call them really excellent pioneers in human services not because of their noble purposes but because of their much pain and trouble.

This note is written for an introduction of two outstanding women, Nightingale and Adams, focusing their common personalities and great activities. This will be followed by Chapter 1 "Their childhood and families", Chapter 2 "Taking first steps of their lifework" , Chapter 3 "Important values of their works" .

プロローグ

科学時代の到来 — 近代

19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパは、人類の歴史の中でもその流れが急激にピッチを上げた時代で

ある。そして多くの歴史家、社会学者はそれまでの農業、手工業中心の身分制度が絶対であった封建時代から、人間平等と科学繁栄による市民社会への幕開けとしての輝かしい時代への期待を込めて“近代”と呼んだ。そして現代人は時には持て余し、誤用してしまいがちの多くの社会科学遺産の発祥であるこの時代を、

いささかの郷愁をこめて“近代”と呼ぶ。そして現代はそれを凌駕できるかの不確定的意味を含めて、同時にそれと切り放しては現代が存在しえないという時代認識から“ポスト近代”と呼ばれている。ともかく、近代とは自然科学の発達の世界国家の地図を塗り替えたダイナミックな時代であった。

1814年、スチーブンスによる蒸気機関の実用化によって生産様式が大きく変化を遂げた。それが推進力になり、産業革命に続く工業化の波がヨーロッパ先進国に押し寄せた。それまでの植民地所有によって富と栄華を誇っていた帝国主義の国々、スペイン、ポルトガル、ロシア、プロシア、トルコの国力は衰退の一途を辿り、入れ代わりイタリア、ドイツ、アメリカなどが隆盛した。これらが近代国家の新顔であり、フランス、イギリスにおいても国内での近代化が急ピッチで進められた。

イギリスでは1825年、ロンドンに初めて鉄道が敷かれ、ダイナマイトやレントゲン、電気の発明など科学、医学での進歩による世の中の様変わりも急激なものがある。またそれらの文明の利器を生産、商売に大いに発揮した中産階級、市民層のエネルギーは、専制君主、貴族支配の政治制度から近代国家という普通選挙による斬新な議会制政治へと推し進めていった。

しかし産業革命によって得られた力と階級制の崩壊という熱い時代の息吹が結び付いて、イギリス、ドイツ、フランス、イタリアなど世界の大国が誕生するまでには、その拡大過程での侵略、紛争、権力闘争による多くの革命と戦争の血が流された。また世界に散らばる広大な植民地での搾取と反乱、制圧による原住民と入植者の大量の血と汗の人的犠牲は、避けられない歴史的イニシエンション（通過儀礼）とも言えよう。

領土争いによる近代戦争

フランスでの7月革命(1830年)、2月革命(1848年)、アヘン戦争(1840)、太平天国の乱(1851-1864)、クリミア戦争(1856年終結)、インドでのセポイの反乱(1857年)、イタリア統一戦争(1859-1861)、南北戦争(1861-1865)など、ヨーロッパ以外のインドや中国など多くの植民地でも、その権利の拡大と民族の独立をかけた衝突により多くの命が失われた。

一方ロシアでは農奴解放(1861年)、ロシア革命(第一次-1905年、3月革命-1917年)、アメリカでは南北戦争という、アメリカ人同士の郷土愛と理念をかけた

戦いの大きな犠牲の上に、奴隷解放宣言がリンカーンによってなされ、自由と民主主義への第一歩が記された。

そのような世界的な近代国家の国境地図の塗り替えに足並みを併せて、多くのロンドン、パリなどの町は家内制工業、商業取引によって裕福になった市民層が町に活気を与え、政治文化としての中心としてだけでなく工業、商業の中心として都市人口が急増し、馬車やガス灯の町から電気に明々と照らされた車の行き交う近代都市へと様相を激変させていった。

変化する都市で暮らす人々もまた、大規模な近代的工場の発達で富を得た資本階級、専門知識や手に技術をもつ中産階級、また農村から都市に流入してきた貧しい労働者たちなどに分化していった。生産様式が近代化すればするほど、所有することにより富が富を生み、労働力しかもたざるものは常に労働を搾取され、階級間の生活のレベルの格差は大きくなる。その結果貧困者が増加し、浮浪者、病人、犯罪の多発など都市化による様々な社会問題、貧困問題が無数に生み出されていくのである。

しかし近代国家を率いた人々は、それまでの帝国主義や重商主義時代の支配者のように単に農民、庶民を搾取するだけではなく、国威のために生かして利用する賢さをもっていた。戦争をする兵力を増強するためには、都市の問題を解決し国民全体の生活の安定を図ることが必要不可欠であると考えた。そこで社会保障制度の充実こそ国家の威信をかけた目標となり、国力増強のために国民生活向上が配慮されるようになったのである。

これがそれまでの上流階級の宗教的義務や支配のためのコストとして、また個人的な慈善であった社会救済事業が、国全体の人口維持、貧困者救済、保健衛生の水準アップと拡大し、社会保障制度として大きな発展をとげる一つの社会的背景である。常に国家の富国強兵と社会保障の整備は機を一にし、表裏一体のものであることは、旧日本帝国で明治政府が行った一連の政策にも共通している。¹⁾

この歴史的熱気を帯びた20世紀をまたぐ時代は、近代国家建設の大変革の歪みやほころびを繕う役割を果たす社会事業の黎明期でもあり、欧米のソーシャルワークの源流でもある。この時代に、幾人かの偉大な女性の名前が残されている。

社会改良への女性パイオニア

中でもその名が広く知られるのは、看護の母といわれるフローランス・ナイチンゲール(英、1802-1893)、リッチモンド(米、1861-1928)、ジェーン・アダムス(米、1860-1935)、メアリー・ウェップ(1863-1943)の4人である。メアリー・ウェップは労働党の閣僚を務めた夫のシドニーと共にイギリスのフェビアン主義(穏健社会主義の一派)の理論的指導者であり、多くの貧困調査、労働組合に関する著述をおこなっている。若いころから、裕福なブルジョワジーの出身でありながら、貧困調査の歴史で重要なチャールズ・ブースのロンドン調査を手伝うなど、社会問題への関心が深く、労働問題、貧困問題などに理論的に取り組み、イギリス社会保障の前進に大きな貢献をした。²⁾ 彼女の携わった多くの調査は、現在では社会調査という学問分野となり、イギリスの社会保障制度を作る際、国民生活の現状を把握するには大変役立った。³⁾

メアリー・リッチモンドは両親をはやく亡くし、貧しい青春時代を苦学して教養を積み、高等教育も受けられなかった。しかし、働きながら教会活動で能力を発揮、慈善組織協会のリーダーとして頭角を現し、友愛訪問事業の実践を通じて多くのケースワークに関する本を書いた。そのソーシャルワーク理論の原典とも言われる『社会的診断論』によって、「ケースワークの母」と呼ばれ、その理想、哲学は現代のケースマネジメント、ケアマネジにまで及び、ソーシャルワーク専門教育者の草分けとして尊重されている。彼女はイギリスで始まった友愛訪問を単なる慈善活動から、専門知識と技能を修得した専門家として社会的地位、実力ともに高めようとした。そのため、ソーシャルワーク専門学校をつくり多くの福祉の人材育成の先鞭をつけた。⁴⁾

専門資格創設の根拠は、1897年当時、アメリカではすでに医師、看護婦、薬剤師、調理師、保母などの専門養成施設が存在しているのに、失業貧困など社会的困難に見舞われている人々を援助するソーシャルワークの専門学校が存在しないのは、おかしいという素朴なものだった。そこで「慈善事業家初等養成学校」または「応用博愛訓練学校」の創設をよびかけたのである。これは直ぐには学校とはならず、6週間の夏季短期訓練コースとして誕生し、1904年には「ニューヨーク博愛学校」として発展し、1年制から2年制に、そし

て類似の大学がボストン、シカゴ、セントルイスなどに普及していった。

そしてジェーン・アダムスは前の二人のように、社会的問題への学問的関心、宗教的慈善事業が全面に押し出された形ではなく、若き日から何か女性としてやり甲斐のある社会活動を模索し続け、社会事業にやっとならぬとそれを見だし、それを多くの仲間たちと共に実現し一生貫いた女性である。無論根底に宗教的ヒューマニズム、社会改革への闘志も裏打ちされていたからこそ大きな力となったのだが、そのきっかけは極めて素朴な女性らしい、「良き隣人愛」に発するものである。

ヨーロッパからのシカゴにひしめいていた移民や貧民の為にセトルメント事業、「ハル・ハウス」から、アメリカ全土の女性の地位向上、平等実現、世界の平和と女性の連帯まで活動の目標が徐々に、スケールの大きなものに敷衍拡大していった。彼女の投じた一石の波及は、水面の輪のようにシカゴから全世界、社会事業から国際連盟まで大きく広がっていった。そしてハル・ハウスからは多くの社会事業家、社会運動家が育ち、アダムスはその偉業を称えられて1931年にはノーベル平和賞を授与されている。⁵⁾

そして、前の3人の社会保障や社会事業とは畑を異にしてはいるが、社会福祉の世界とは関連深い看護の世界で、母と慕われているナイチンゲールがいる。これら4人の女性のいずれもが大富豪、貴族という血筋でもなく、いかにも女性闘士、女丈夫というより皆地味でおとなしく堅実そのものの個性の持ち主であった。ただし皆その楚々とした女性らしさの中に、きらりと光る信念を貫くしなやかな強さ、心意気、不正や腐敗を憎む潔癖さが共通している。また4人のうちウェップ以外は皆独身を通したが、人間への広い愛情、子供や若き命をはぐくみ育てる大いなる母性があふれていた。また時代の弱者や同胞のために辛苦を厭わぬエネルギーと、社会に自分の信念に基づく正義を行うという高潔な闘志が満ちていた。

二人の仕事と人生の共通点

これらの女性の中で特に看護という分野を形成し、世界中で後代まで語り継がれる影響力をもったナイチンゲールと、世界的に社会改革と社会事業の先駆的女性として注目されるジェーン・アダムスの生涯に注目してみよう。その育った家庭、形成された女性としての自我、そして時代の一般常識に逆らうような分野で

事業を起こし、周囲を巻き込み型破りの行動をしたこと、その不撓不屈の創成期、そして後の社会へ与えた影響、功績などを、伝記や著作に残された限られた材料から追跡比較してみる。二人の取り組んだ仕事はその時代急務となった活動だったが、国家や組織がまだ取り組んではいない先駆的社会事業であった。またそれが全く小さな一個人の意志、それも若い女性の心意気に源を発しているところが、極めて偉大なのである。

これらの論証の基礎となる資料は、二人の伝記や著作に残された限りある材料で、必ずしも客観的とはいえないものもある。がもともとドキュメンタリーもノンフィクションも作者の主観に基づいて取捨選択された足跡が、作者の映像、文章という多分に主観的手段により語られるわけで、所詮は絶対的真実とは掛け離れたものである。このノートの意図は絶対的真実に迫ろうという大それたことではなく、歴史に名を残す二人の女性の個人史の類似点、パーソナリティー、家族関係での共通点を鮮明にすることである。

美貌というより容貌の地味さと内に秘めた意志の強さ、身体的にも頑健というより若い頃の病のため一生病弱で、ベッドに縛られる晩年を強いられたにも拘わらず、手紙や多くの著述などで社会や後継者に与えた影響力の大きさ。若きころのロマンスや結婚の可能性を自ら選択した社会的使命のため断念したこと⁶⁾。そのかわり多くの男性の支援者、協力者に助けられ、男同士にひけをとらない尊敬と忠誠を勝ち得たこと。また人々の命と生活を守る女性ならではの分野で時代を越える偉業を成し遂げたことなど、重ね合わされる部分が多分にあり、現代の女性にも訴えるものがある。

女性の参政権や職業をもつことが奇異と言われながらも、上流、良家の子女としては矚目を持った時代に、その先駆けとして多くの施設、病院、学校を作り人材を育てた。単なる権威的力や政治力ではなく、その行動と実践を伴って示した範は、普遍的かつ極めて現代的意義をもつ。だからこそ、長く多くの伝記や専門書において語り継がれているのであろう。

ナイチンゲールは看護の母としてその献身的精神が受け継がれているものの、その野戦病院での活動は兵士のためには傷病回復後の生活指導、軍属家族のためには生活手段提供⁷⁾など、ソーシャルワークの要素が強かった。看護学校の創設、陸軍兵舎の環境改善、インドの食料政策などもまさに、医学そのものよりかなり社会事業とも言える側面をもっていた。また医学的技

術の進歩していない時代の看護は、むしろ病者の生活全般を整えるという介護に近い。そこでセツトルメントで外国移民の住宅、教育、社会活動を組織化したアダムスのコミュニティ・ワークと称されるソーシャルサービスの一分野と、ヒューマン・サービス (human services) という点で一致する。

出生においては片やイギリスの上流階級、かたやアメリカの開拓者時代の粉屋からの新興ブルジョワなど外面的生い立ちの差異はあるものの、使命を抱いた背景は極めて純情素朴な博愛や弱者への深い共感であった。何か社会的に有意義で人の役にたつ仕事をしたいという素朴な初心から、属する階層からは非難されるような仕事を意志の強さで貫きとうした二人の生涯は、社会の矛盾に敏感で生きがいのある将来を模索する若い人には、まさに“温故知新”になりうる。狭い国土と高い人口密度で、ヨーロッパ先進国にも例を見ない急激な高齢化に対応を迫られているわが国では、社会福祉従事者や看護婦など実力ある人材を必要としている。その女性に適した領域に専門職への門戸を開いたとも言えるこの二人の生き方は、現代でも多くの示唆するものを含んでいる。

注・引用文献

- 1) 一般には明治政府の富国強兵策と称する。1889年憲法を發布した大日本帝国は、教育制度や中央集権制で国家統制を押し進め、軍備増強、工業発展で西欧の列強に肩をならべるべく富国強兵策を取った。日清戦争1894年、日露戦争1904年により軍備増強を進めるが、国力を強め優秀な兵隊を増やすには保健・公衆衛生整備により乳児死亡率を減らし健康な若者を増やすという人口政策、兵隊の家族の生活を保障する恩給、遺族年金制度とともに保健所など公衆衛生面も発達した。
- 2) M. コール 久保まちこ訳「ウエップ夫人の生涯」誠文堂新光社 1982 p44
- 3) 小山路男 「社会保障の潮流IVウエップ夫妻」社会保障研究所<社会保障選書> 1977 P62
- 4) 小松源助 「リッチモンド、ソーシャルケースワーク」有斐閣 1979 P34
- 5) ジェーン・アダムス 岩崎学術書院 柴田善守 訳「ハル・ハウスの20年」
- 6) ナイチンゲールは25歳で社交界で知り合ったヘンリー・ニコルソンのプロポーズを、29歳でリチャード・モンクトン・ミルズとの求婚を断わる。モンクトン・ミルズは姉と結婚するが、その後も彼女の仕事を陰となって支える良き理解者、協力者であった。
- 7) 本来の看護以外にも病室、厨房、トイレなどの設計や衛生環境、食事の栄養向上に尽力し、死亡率を激減させた以外に、

近代の福祉に生きた女性パイオニア（その1）

回復期の教育のない兵士が暇を持て余して遊びや賭け事にうつつを抜かさなため、図書館や字を教える学習教室を開いた。そこで覚えた字で手紙をかかせ本国の家族とのコミュニケーションを維持させるため郵便局を、給料を無駄遣いさせないため銀行を開設させた。また兵士についてきた妻たちには病室の清掃、食事づくり、リネン類の洗濯を請け負わせて仕事を与えた。

参考文献

- バーバラ・ハーメリック著 西田晃訳「ナイチンゲール伝」
メディカルフレンド社 1979
セシル・ウーダム・スミス著 武山満智子訳「フローレンス・
ナイチンゲールの生涯」現代社 1981
ナイチンゲール著作集 現代社 1977
ナイチンゲール著 薄井坦子他訳「看護覚え書き」現代社 1983